

# 内科・糖尿病内科

## 担当医師 井口昭久教授

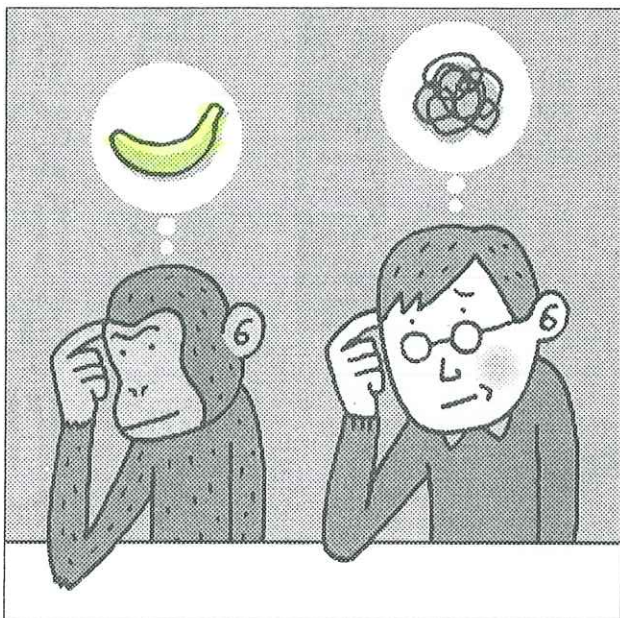
### の記事が掲載されました。

#### 12月12日 朝日新聞 朝刊

#### (毎月1回掲載中)

## 老年学

## サルのように…



The Asahi Shimbun

京都大学霊長類研究所長の松沢哲郎先生の講演を聞いた。先生はチンパンジーのアイちゃんをチームで育てている。そのアイちゃんが病気で寝たきりになった時、研究所の人たちから手厚い介護を受けたそうだ。アイちゃんは介護されたことに、ただられしそうであった、と先生は言っていた。人以外の高等脊椎動物は、現在の心象は思い描くことはできないが、過去と未来についてはそうした感覚を一切持たないそうである。

愛知淑徳大学教授  
医師

### 井口 昭久

る。人は、過去の記憶と未来への予測の接点で現在の心象を思い描いている。私などは取り返しのない後悔の記憶と、未来への不安のはざまに生きている。

例えば、私が骨折で寝たきりになったとする。家で介護を受けた。だが子供たちは子育て中で、妻は仕事を持っている。施設に入ることになり、24時間の手厚い介護を受けることになったとする。私は来し方行く末を思い、憂いに満ちた入所生活をおくるだろう。

「チンパンジーは目の前にある暮らしを生きています。だからよくよ悩みません。人間は時間や空間を超えて想像できるので、悩みます。人間は思い悩むサルだといえるかもしれません」（「新しい霊長類学」と松沢先生は書いている。老人は忌まわしい過去を忘れ、将来の不安を捨てて今を生きたい方がいいじゃないか。「サルのように」と思うのだがそうはいかない。それが厄介なところである。